

氏 名 尹 熙洙

学位(専攻分野) 博士(文学)

学位記番号 総研大甲第 2677 号

学位授与の日付 2026 年 3 月 24 日

学位授与の要件 先端大学院先端学術専攻 (日本語言語科学コース)  
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 日琉諸語の一員としての宮古語音韻史

論文審査委員 主 査 五十嵐 陽介  
日本語言語科学コース 教授  
小木曾 智信  
日本語言語科学コース 教授  
山田 真寛  
日本語言語科学コース 准教授  
Thomas PELLARD  
フランス国立科学研究所 専任研究員  
平子 達也  
南山大学 人文学部 准教授

# 博士論文の要旨

氏 名：尹 熙洙

論文題目：日琉諸語の一員としての宮古語音韻史

宮古語は、宮古列島（沖縄県宮古島市・多良間村）で伝統的に話されてきた言語で、約 30～40 の方言を持つとされる。日琉語族は日本語と琉球諸語に大別され、琉球諸語は更に南北の語群に分かれるが、そのうち、宮古語は南琉球語群に属する。

宮古祖語の再建に関する先行研究では、宮古語諸方言の間の主な音韻対応を確立し、一部の語彙において多数決や節約（parsimony）の観点から合理的な祖語形を提示しているものの、変則的な音韻対応の通時的由来に関して十分な説明がなされていなかった。本論文は、変則的な音韻対応を示すものも含めて、なるべく多くの語彙が説明できるような再建を提案することを目的とした。

本論文は二部構成になっており、第 I 部では宮古語の中の 15 世紀沖縄語からの借用語に焦点を当て、宮古祖語の音素目録について再検討を行った。第 II 部では、宮古語の語彙の由来について、より完全な歴史を記述するために、宮古祖語より前の段階である琉球祖語と日琉祖語に関する諸問題を扱った。各章の要旨は以下のものである。

## 第 I 部「宮古祖語と 15 世紀沖縄語」

第 1 章「はじめに」では、宮古祖語の再建に 15 世紀沖縄語との言語接触を考慮しなければならぬ理由として、二重上昇（double raising）と順行硬口蓋化（progressive palatalization）という二つの現象を紹介した。二重上昇は、北琉球諸語のデータや本土日本語との比較によって琉球祖語の段階で中段母音 \*e, \*o を持っていたはずの語の一部が、宮古語や他の南琉球祖語のデータからはまるで琉球祖語の狭母音 \*i, \*u に遡る形式を持つように見える現象である。順行硬口蓋化は、北琉球諸語の特徴の一つであるが、宮古語を含む南琉球諸語では一部の限られた語にその痕跡が見られる。同章では、該当する語彙を沖縄語からの古い借用語とみなすことによってこれらの現象を説明することができる旨と指摘し、更に、歴史的な背景からその借用が行われた年代は 15 世紀であるという推測を提示した。

第 2 章「先行研究による宮古祖語の再建とその年代」では、宮古祖語の音素目録を提示している先行研究として Bentley (2008) と Pellard (2009) を挙げ、その特徴について論じた。Bentley (2008) の再建は、破裂音の弱化と母音の上昇が起こる前の段階で、琉球祖語と同じ 5 つの母音が再建される。Pellard (2009) の再建は、破裂音が弱化し、母音が上昇した後の段階に当たり、母音音素の数は 4 つになっている。同章では、『朝鮮王朝実録』漂流民記事との照合によって、前者（本論文の用語では「前期宮古祖語」）は概ね 15 世紀後半、

後者（本論文の「後期宮古祖語」）は16世紀前半の言語であると主張した。二重上昇によって沖縄語からの大量借用が行われた時代は前期宮古祖語であることがわかっているので、第1章で提示した推測（借用の時期が15世紀であること）が確認された。

第3章「宮古祖語の子音体系の再検討」では、宮古語に見られる超重音節の回避傾向から、先行子音を伴わない摩擦母音  $\eta$  がかつて有性摩擦音  $*z$  であったことを示し、その一般化によって宮古語における摩擦母音の発生を破裂音の破擦化（硬口蓋破擦化・両唇破擦化）で説明することを提案した。また、前期宮古祖語において狭母音の前で  $*t$  と  $*ts$ 、 $*r$  と  $*r$  の区別がそれぞれ存在したことを論じ、先行研究の再建より完全な宮古祖語の子音目録を提示した。

第4章「宮古祖語の母音体系の再検討」では、宮古語の中の15世紀沖縄語からの借用語に見られる特殊な母音対応を検討し、先行研究によって再建された宮古祖語の母音目録に加え、短母音  $*\epsilon$ ,  $*\alpha$ , ( $*\circ$ ) を新たに再建するべきであると主張した。そのうち、 $*\epsilon$  と  $*\circ$  は15世紀沖縄語の語中音節の中段母音  $*e(:)$ ,  $*o(:)$  に対応し、 $*\alpha$  は硬口蓋化破裂音の後ろ、または硬口蓋化共鳴音の前  $*a(:)$  に対応する。同章では更に、短母音  $*\epsilon$ ,  $*\circ$  に対応する長母音  $*\epsilon:$ ,  $*\circ:$  の存在を示した。結果として、前期宮古祖語には8母音、後期宮古祖語には7母音の体系が再建された。

## 第II部「宮古祖語を超えて」

第5章「琉球祖語と古代九州基層仮説」では、本論文で「古代九州基層方言」と称する、かつて九州のどこかで話されていた方言から借用された語が琉球祖語の語彙の中に多数存在することを指摘し、古代九州基層方言の特徴と、同方言からの借用語に見られる音韻対応の規則について論じた。特に、母音  $*o$  の三重反映 (triple reflex) から、古代九州基層方言は強勢言語であったとし、強勢の配置に関する規則を記述した。また、古代九州基層方言の知識が宮古語の研究に役立つ例として、語源が定かではなかった宮古語の  $ukia\eta \sim ukij$  「鬱金」を挙げた。

第6章「日琉祖語について」では、日琉祖語における母音脱落規則の存在を提案し、母音脱落によって子音連結や二重母音・三重母音などが生じている語の例を挙げた。また、母音脱落とアクセント式の関係について論じた。

Results of the Doctoral Thesis Defense

## 博士論文審査結果

Name in Full

氏名 尹 熙洙

Title

論文題目 日琉諸語の一員としての宮古語音韻史

本論文は、琉球諸語のうち南琉球諸語に属する宮古語を対象に、諸方言の比較に基づいて宮古祖語の音韻体系および音韻史を再検討し、さらに琉球祖語および日琉祖語にまで視野を広げて宮古語に至る歴史的变化を位置づけ直すとともに、琉球諸語間の言語接触を考慮した再建体系を提示するものである。本論文は、第Ⅰ部「宮古祖語と15世紀沖縄語」(第1章～第4章)、第Ⅱ部「宮古祖語を超えて」(第5章～第6章)、および第7章「おわりに」からなる。

第1章「はじめに」では、本論文の目的・研究史的な位置づけが示される。ここでは、宮古語音韻史を理解するうえで、言語接触の視点が不可欠であることが論点として提示される。とりわけ「二重上昇」や「順行硬口蓋化」など、沖縄語からの借用によって説明されうる具体的事例が導入され、従来説明が難しかった音韻対応や例外的な語形が、歴史的過程の一部として説明可能であることが明確にされる。さらに、18世紀に編纂された琉球資料『球陽』『宮古島記事仕次』などの記述に基づいて、宮古語が沖縄語から顕著な影響を受けた年代は15世紀であると推定される。加えて、古い借用語と新しい借用語の区別など、以降の議論の前提が整えられる。

第2章「先行研究による宮古祖語の再建とその年代」では、宮古祖語再建に関する2つの主要な先行研究の体系が整理され、両者の再建案の特徴や問題点が指摘される。さらに、宮古祖語を年代的に2つの段階、すなわち子音摩擦化と母音上昇が生じる前の段階である「前期宮古祖語」と、それらが生じた後の段階である「後期宮古祖語」を設定し、朝鮮資料『朝鮮王朝実録』の記述に基づいて、前者の年代を15世紀後半、後者の年代を16世紀前半と推定する。そして、沖縄語からの大量借用が行われた時期に対応するのは前期宮古祖語であると主張する。これにより、本論文がどの段階の祖語を対象にどのような再検討を行うのかが明確化される。

第3章「宮古祖語の子音体系の再検討」では、宮古祖語の子音体系について、宮古語諸方言の音韻対応を詳細に検討しながら再建が行われる。既存の体系では説明困難であった音韻対応や例外的な語形について、借用語層・方言差といった要因を切り分け、子音の再建を議論している。

第4章「宮古祖語の母音体系の再検討」では、母音体系の再建が行われる。諸方言間の母音対応の細部を検討し、宮古祖語の母音目録を提示する。第3章の子音体系の再建と同様に、多様な要因を整理しつつ精密な再建へと導く、論旨の見通しを得るには相応の注意深い読解を要する重層的な議論が展開される。第3章・第4章によって、宮古祖語の音韻体系が子音・母音の両面から総合的に再検討され、宮古語音韻史研究の基盤をなす再建体系が精緻化される。

第5章「琉球祖語と古代九州基層仮説」では、議論の射程を琉球祖語へと広げる。特に「\*oの三重反映」などを手がかりに、琉球祖語の体系や音韻史に対する示唆が検討される。ここでは、かつて九州に存在したが現在は消滅した日琉系言語—古代九州基層語—からの借用を仮定することによって、従来説明が困難であった日本語との不規則な音韻対応を示す語や語源不明の語の説明が可能で

あることが示される。宮古語内部の再建（第Ⅰ部）の成果を、より上位の祖語再建と接続する章である。

第6章「日琉祖語について」では、射程を日琉祖語にまで広げる。子音間における母音の脱落と、それに由来する子音連結を持つ語が再建されるとともに、母音脱落を生じさせた強勢体系が再建される。例えば形容詞語幹は子音\*sで終わると再建され、母音脱落の有無によって「ク活用」と「シク活用」の区別が生まれたという新説が提案される。さらに、従来説明できなかった音韻対応を、母音脱落の結果生じた子音連結の方言ごとに異なる音変化の結果として説明できることが説得的に示される。また、母音脱落とアクセントの起源との関連も扱われ、音韻史・韻律史を横断する視点が提示される。宮古語史の議論が、日琉語族全体の歴史比較へと接続されうることを示す章であり、本論文の射程の広さが端的に現れている。

第7章「おわりに」では、全章の議論が総括される。

以上の構成に基づき、審査委員会は本論文の成果を次の点で高く評価する。

第一に、本論文は宮古諸方言の比較に基づき、宮古祖語の子音体系・母音体系を総合的に再検討し、既存の再建体系を踏まえつつも、より整合的かつ精緻な再建案を提示した。これは、宮古語史研究の基盤を実質的に更新する成果として高く評価できる。

第二に、本論文の最大の独自性、ひいては学術的貢献の核心は、15世紀沖縄語からの借用語を含む琉球諸語間の言語接触を、再建体系および音韻史の説明に正面から据え、体系的に組み込んでいる点にある。借用語を祖語再建にとっての例外・攪乱要因として周縁化するのではなく、その層位や成立事情を精査したうえで、むしろ歴史過程を説明するための積極的な証拠として取り込むという方法は、従来の議論の盲点を突くものであり、宮古語史の記述をいっそう説得的なものへと押し上げている。こうした視点は、宮古語研究にとどまらず、日琉諸語史研究全体に対しても強い方法論的インパクトをもつものであり、今後の研究の基準点となりうる成果である。

第三に、本論文は宮古祖語にとどまらず、琉球祖語・日琉祖語へと議論を拡張し、宮古語音韻史を上位の系統史の枠組みのなかに位置づけ直しており、研究の射程がきわめて広い。とりわけ、日琉祖語に子音連結を再建する枠組みは、従来の前提そのものに挑む大胆さと、具体的な説明力に支えられた独創性を兼ね備えている。子音連結を欠く体系を日琉祖語に再建する立場が主流であった中で、本論文の提案は、将来の検証を俟つべき点を含むとはいえ、議論の枠組みを再編しうる可能性を持つものであり、閉塞感のあった日琉諸語比較言語学研究に新たな論点を提起し、研究の地平を切り拓くものとして、高く評価できる。このような意欲的な射程と卓越した着想は、今後の検証・整理を通じて一層の確立が期待される。

以上のように、本論文は宮古語音韻史研究において重要な前進をもたらすだけでなく、琉球諸語・日琉諸語の比較言語学的研究にも貢献するものである。出願者が当該分野において自立した研究を遂行しうる能力を備えていることを、本論文は十分に示したと評価できる。

もっとも、本論文は宮古祖語から日琉祖語に至るまで射程の大きい問題群に取り組むものであり、その野心的な構想ゆえに、いくつかの点については今後の検討によってさらに明確化されることが期待される。たとえば、先行研究における枠組みの問題点について、必ずしも十分な整理がなされていない箇所があるため、本論文が提案する精緻な再建体系が、読者によっては過度に複雑であるとの印象を与えうる。また、母音脱落を生じさせる要因として想定される祖語の強勢体系については、なお完全な形で再建に至っていないため、母音脱落による説明の妥当性の検証は今後の課題として

残されている。ただし、これらは本論文の意義を損なうものではなく、むしろ本論文が切り拓いた問題領域の広がりや今後の発展可能性を示すものといえる。

最終試験（口頭試問）において、出願者は本論文の目的・方法・結論を明確に説明し、先行研究との関係、再建体系の根拠、言語接触を考慮することの妥当性等に関する質疑にも的確に応答した。これにより、本論文の内容および周辺領域に関する理解と知識が確かなものであること、ならびに当該分野の研究者として必要な学力および研究遂行能力を備えていることが確認された。

以上の理由により、審査委員会は、本論文が学位の授与に値すると判断した。